



TITLE:

老年期の女性性に関する心理臨床的論考 (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

西尾, ゆう子

CITATION:

西尾, ゆう子. 老年期の女性性に関する心理臨床的論考. 京都大学, 2017, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20125>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	西尾　　ゆう子
論文題目	老年期の女性性に関する心理臨床的論考		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>超高齢化社会を迎えた現代日本において、老年期の多様性を考慮した心理臨床学研究は、十分とはいえず、とりわけ女性を対象とした研究は多くない。しかし現状では、平均寿命は男性より女性が長く、老年期をどのように過ごすのか、心身両側面からの検討は心理臨床領域において、重要な課題といえる。著者は、この重要課題に継続的に取り組み、従来注目されることの少ない老年期女性の心身の変化を女性性の発達変容に関わる現象として捉え直し、質的検討を中心に入念な研究を重ね、その集大成として本論文をまとめあげた。</p> <p>論文の構成としては、第Ⅰ部「研究の基礎」、第Ⅱ部「研究の展開」、第Ⅲ部「総合考察」の3部から成っている。第Ⅰ部「研究の基礎」において、まず第1章では、本論文の基本的視点と枠組みを示しつつ、本研究の意義と重要性についてふれる。そして第2章では、精神分析の創成者 Freud, S.、対象関係論を構築した Klein, M.、そしてライフサイクル論を提唱した Erikson, E. H. の晩年を文献による詳細な考察を行いながら、老年期研究の歴史を概観し、心理臨床学とその近接領域において老年期がどのように捉えられてきたのかを把握している。さらに第3章では、乳幼児期の心の発達を重視する精神分析の視点だけではなく、生涯発達やフェミニズムの視点も加えて多角的に論じる。</p> <p>こうして、老年期の女性性の研究に関する十分なレビューを行った後、著者による研究成果の第Ⅱ部が展開する。まず第4章において、本論文で用いる質的研究の方法論、すなわち、半構造化面接法と投映法の特徴と本研究における意義を述べる。そして第5章「老年期女性の心的世界の探求」1節では、第一研究として、老年期女性の自己認識に関する理解の深化を目的とする半構造化面接の結果をまとめている。そこでは、①日常の中で感じられる身体内外の変化・不全が各人の身体イメージに働きかけ、それによって加齢の現実が意識されること、②内的に感じられる自己感や外界に向かう好奇心は若々しい感覚が保たれており、多くの女性が実年齢よりも「若くみられたい」傾向があるため、暦年齢と自己の感覚にギャップが見られること、③中年期と老年期の移行期にいるように感じている女性が多く、老年期への移行は緩やかに進むプロセスであること、④老年期への移行期には「現役の自分」であることを失うことを悼む喪の哀悼の仕事が見られることの4点が示されている。</p> <p>続く第5章2節で論じる第二研究は、前節で得られた結果をもとに、女性が老年期を生きる過程において生じる心理的变化について「個」と「関係性」の2側面から理解を深めることを目的とした質的研究である。老年期女性の語りから、どのような心理的テーマを「個」として生きているのか、そしてどのような「関係性」の中で誰と老いを共有しているのかについて理解し、各自の体験を貫く普遍的特徴のモデル化を試みる。ここでは、【Being / Becoming】をキーワードとして整理された。</p> <p>また第6章1節では、「身体と老い」をテーマにした第三研究から、身体の次元で女性らしい特質を失うことにまつわる内的体験の理解を試みている。「みる」という動詞をキーワードに、老いゆく自分の身体をどう「みる」か、どのように人に「みられたい」と望むかについて検討している。さらに続く第6章2節は、第四研究「ロールシャッハ法を通して理解するジェンダーイメージ」について論じ、第7章1節のTAT</p>			

による第五研究と共に、投映法によるアプローチからジェンダーイメージ、性愛的感情をも含めて個人のパーソナリティの在り様について、力動的に理解を進める試みである。ここでは、さまざまな「喪失」にまつわる不安の様相とその向き合い方、防衛について詳細な分析をまとめた。第7章2節で研究の最後として第六研究「回想法を通した女性の生」では、個人回想法によって、女性性の変遷を微視的に描き出すことを目的としたもので、個別事例から入念に検討されている。そして Erikson, E. H. が老年期の発達課題とした「Integrity」という概念について、女性性という視点から考察がまとめられた。

最後の第Ⅲ部「総合考察」では、女性にとって、一般に喪失・衰退の時期と言われる老年期は、「みにくい」ことが「みえる」ようになり、自らの不完全な生き様や、死に向かい衰えていく身体を受け容れる心理的「器」が生成される過程と捉え、新たな視点と共にまとめている。本論文全体において、たとえ視覚的には年を重ねているように見えても、女性個人の主体としての老いの感覚は多様であり、各人の心のあり様に寄り添う態度が重要であることが主張されている。

そして老年期女性の「年輪」の内面を理解し、心理臨床実践を進める示唆によって、本論文は締めくくられている。

(論文審査の結果の要旨)

現代日本において、高齢化社会にかかわる諸問題の検討は、最重要課題であり、医学、社会学等の領域でさまざまなアプローチが進みつつあるが、心理学領域における研究は、端緒についたところである。Erikson, E. H. の提唱した「ライフサイクル理論」が、男性モデル重視であるとの批判もあるように、女性を対象とした心理臨床的研究は、未だ議論が尽くされていない。本論文は、老年期女性の心身の変化、その自己感に関する詳細な検討を行った、現代的ニーズに応えうる独創的な論文である。論文全体を3部構成にしてまとめ、老年期、女性性というキーワードによって、先行研究の丁寧なサーヴェイがなされ、各章が問題意識に沿って適切なアプローチによる分析から考察が展開し、明快にまとめあげられた質の高い研究論文と評価できる。

第Ⅰ部「研究の基礎」を構成する第1章から第3章を通して、本論文の重要な視点である精神分析学を広く展開させてきた先駆者たちの晩年に関する文献的考察をし、さらにフェミニズム研究について詳細な検討を重ねる中、次の視点が浮かび上がる。まず「女性性」という概念は、心理臨床学において、女性という性に生まれた個人がその性を受容していくプロセスについて取り上げられることが多かったが、心理臨床実践においては、女性性にかかわる困難を通して個人の中核的な心理的問題が呈されることが少なくない。それは、女性としての社会的役割を担うことへの抵抗、男性と関係を築くことにかかわる葛藤であり、すなわち「身体」、「社会的役割」、「性愛」の3つの側面からその困難が表出されると著者は主張する。本論文では、老年期女性の身体機能や容姿の変化の受容、社会的役割の終了や変化への適応、またそれらの変化が異性との関係性、女性としての自己のとらえ方にどのように影響を及ぼすかという問いをもとに、入念に検討することを明示する。

著者による質的研究によってまとめられた第Ⅱ部では、きわめて多角的な視点によって上記の考察を可能にしている。調査法、面接法、投映法を駆使し、しかも心理臨床の基本としての「聴くこと」を柱に据え、対象者の語りを丁寧に分析する。臨床例ではなく、ある意味普通の日常生活を送る老年期の女性たちの語りから、臨床的な視点を見事に見いだし、彼女らがどのような生き方をしているのか、さらにその世代がどのような理解や支援を求めるのかといった観点にまで視野を広げた考察がなされている。こうしてまとめられた第5章2節の老年期女性の心の変容過程に関するモデル図は、前半のまとめとしての重要な視点を提示する。新たな視点として示された「死をめぐる想い」の考察にも、文筆家と免疫学者の対談、精神分析学者の論考を多面的に理解して、死が内包された身体に生きる我々が、いかにして死を育てていくのかという観点から検討を進めており、著者の視点の広さのみならず深さが評価できる。第6章では、老年期女性の「みられる意識」についても言及し、より深い無意識の理解を目指してロールシャッハ法からジェンダーイメージに迫る。そこから老年期女性がどのような対象と同一化して「老い」や「自己」をとらえているのか、特にすでに亡くなった対象としての母との関係性にも大きな意味を見いだしている。

研究の締めくくりとして第7章では、TATを用いた物語を通じた検討、バウムテストと個人回想法をもとにした事例研究へと展開する。本論文で用いた投映法について、老年期の対象者への施行上の工夫、回想法の語りの傾聴に至るまで、心理臨床実践の方法についても深く検討がなされる。特に回想法では、「ながめる」というキーワードにより、聴き手の存在によって自分の人生を俯瞰する視点が生じることを強調し、その視点こそが、老年期の integrity にかかわっていると考察を進めている。冒頭より重要な視点として挙げてきている、「研究状況における二者関係」をも含み込んだ、面接経過の記述は、この考察への道筋として、繊細かつ丁寧にまとめ上げられている。

これらの研究を総合的にまとめた第Ⅲ部総合考察では、老年期女性が性的な存在と

して見いだされにくかったことを指摘し、本論文での「女性性」とは、女性という性を持つ生物学的、心理学的、社会的特質と再定義する。そして、女性を示す特質の変化を受け入れることが「喪の哀悼の仕事」であり、苦難を伴うそのプロセスには、生者と死者の両者から支えられる、肯定されている感覚を必要とすると主張する。その際に欠かせない視点である「性」をめぐり、多角的な質的アプローチからその本質に迫ることができた本論文の独創性について、高く評価できる。そして著者が一貫して主張してきた研究状況における二者関係へのまなざしが、多くの研究協力者の語りをより活性化し、「未解決のトラウマと凍結された悲嘆」をいかに傾聴すべきかを提示する、極めて心理臨床実践的な意義を持つ論文と評価することができる。

試問では、本論文の高い独創性を評価した上で、世代継承性といった老年期女性の諸側面と論文の骨格部分との関係性の明示や、さらに検討可能な投映法の分析視点について指摘を受けた。また「老年期の日本人女性」としての特徴について、国際的に発信する上での議論が展開した。しかしながらこれらの点は、本論文が、心理臨床学領域において、国内外に発信できる高度な研究であり、今後の著者の実践研究における発展性を意味するものと位置づけることができ、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 29 年 2 月 23 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降